

戦後八〇年の「ありがとう」

福岡市立高取中学校3年 嶋本 香雪

戦後八〇年のこの夏、カラー化された戦争写真（映像）を見る機会があった。沖縄戦、特攻機の出撃、空襲後の焼け野原、原子爆弾投下時の雲。白黒写真としては今までに何度も本で見たことのあるものだったが、カラーになると受ける印象が全く違った。八〇年前に起こった過去の戦争ではなく、つい最近に自分のすぐ身近で起こったことのような気すら、ひしひしとしてきたのだ。着ている衣服が違うだけで、写真の中の人物はみな、知っている誰かに似ているような気がした。今私が住んでいる街が瓦礫になったら、きっと同じ風景になるのだろう。私はたまたま、生まれた時期が少しづれただけだったのだ。

多くの人が命を落とし、大切な人を亡くし、日常を奪われた昭和の戦禍。そこからたった八〇年。自分の日常生活を改めて見回してみると、衣食住に事欠かず、便利で快適で安全な暮らしがある。それを至極当たり前のこととして、将来の夢がどうだの、受験勉強が進まないだの、およそ生命や衣食住が脅かされる状況では悩むことすらできないようなことにちまちまと悩み、「青春」の日々を享受している。

しかしそれはひとえに、戦中・戦後を生きた私の曾祖父母、祖父母世代が必死に日本社会を立て直し復興することに力を尽くしてくれたこそに他ならないのではないか。そう改めて感じた時、私はふと、この世代の人々皆に、心の底から深い感謝を伝えたくなった。想像を絶するような戦禍を生きぬいてくれたこと、戦後の苦しい時期でも一人一人が前に進み続けてくれたこと、安全で快適な社会の土台やしぐみを再建し、そこに今の私たちを迎えてくれたこと。けれども、それらに対する「ありがとう」は一体どのようにして伝えたら良いのだろうか。

私なりに考えた答えの一つが、税を納めることだ。

税金は年金、医療、介護の充実にも使われ、病気になり治療が必要になった時や歳をとって今まで通りの生活ができなくなった時に、個人の経済的負担を緩和し安心して暮らせるような公共サービスに繋がっている。私たちの曾祖父母、祖父母世代は医療・福祉のサポートが重要になる年代のため、私たちは納税を通して彼らの Quality of life の維持に役立つことができるのではないだろうか。そうならば、納税は「ありがとう」の代弁である。

納税は日本国憲法に定められた国民の義務ではある。しかしその使い道を考えた時に、「しなければならないものだからする」というようにのみ捉えることは、どこかもったいない。数年後、私が成人し一人の納税者になった時には私なりに、今の日本を作ってくれた世代への「ありがとう」の想いをのせることができたらと思う。

二〇二五年八月十五日。八〇回目の終戦の日に、曾祖父母世代の十五の夏に心を寄せた。